

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

札野たのより府中あたりを武蔵野といふ。季経卿の歌に、

武蔵野の萩やすすきをほりすてて植うゑておかばや瓜うりや茄子なすびを

とよみたまひし **a** のごとく、今は田畑いんげんになりて、一村一村の民家おびただしく、瓜・茄子をはじめ菜・大根だいこん・猪真まいもの野菜を、毎日毎日馬うまにて江戸へつけ出だす。しかれども、芋いもは多おほいく芋多くて真芋まいもはすくなし。そのゆゑは、猪真芋まいもを好みて掘り食らふゆゑに、百姓の屋敷構への内うちにのみ作るゆゑなりといふ。陶々齋たうざいと遺佚いじつ、ここへ行きて、「さてさて広きことかな。『月つきの入るべき山やまもなく草くさより出でて草くさに入る』といひしもことわりなり。これを本歌にして一首 **b**」とて、陶々齋たうざいがよむ。

武蔵野は名のみばかりぞ家いへ続き軒のきより出でて軒のきにこそ入れ

遺佚いじつがいふ、「よき歌なり。誠に聞き及びしより広き野なり。『ゆけども秋の果てはなし』とよみたる歌もあり」。これを本歌にして返し。

武蔵野は行けども家の果てもなしいかならむ間に乗りてめぐらむ

陶々齋たうざいがいふ、「この歌よしとも思はれず。『乗りてめぐらむ』といへども乗る物なし。馬も駕籠かごもならずば、せめて大八車おほやちまになりとも乗りたらばよからむ」といふ。遺佚いじつがいふ、「乗り物こそあれ。』 **c**』と馬をよみ入れたり。隠し題にかやうによむことはまれなる歌人なるべし。その方の歌にこそ、軒のきより出づるものもなければ入るものもなし」と笑へば、陶々齋たうざいがいふ、「馬の隠し題をさのみ慢おごじたまふな。我も『家いへ続き』と **d**』を隠してよみたり。いびきさらば、とてもものに武蔵野を大きくよまむ」とて、陶々齋たうざいがよむ。

西は富士東は海の名のみして雲も霞も武蔵野の原

遺佚いじつがよむ。

e

(戸田茂睡『紫の一本』による)

問一 空欄 **a** に入る、最も適切な語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ おそれ
- ロ ねがひ
- ハ よごと
- ニ かねごと
- ホ ことわざ

問二 空欄 **b** に入る、最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ よませむ
- ロ きかなむ
- ハ のたまはむ
- ニ まゐらせむ
- ホ うけたまはらむ

問三 空欄 **c** に入る、最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 武蔵野は
- ロ 行けども家の
- ハ 果てもなし
- ニ いかならむ間に
- ホ 乗りてめぐらむ

問四 傍線部1「まれなる歌人なるべし」は本文中でどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ すぐれた歌人にちがいない
- ロ 有名な歌人でありたいものだ
- ハ 異端の歌人といってよからう
- ニ 不思議な歌人なのかもしれない
- ホ めつたに会えない歌人だったろう

問五 空欄 d に入る、最も適切な語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 月
- ロ 家
- ハ 野
- ニ 筒
- ホ 雲

問六 空欄 e に入る、最も適切な歌を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 武蔵野や横雲かすむあけほのに春のかなしき色は見えけれ
- ロ 武蔵野にしかもあかねのおほかるにただ紫の名のみなりけり
- ハ 武蔵野のながめの末にたくへては富士やさながら草の上の露
- ニ 武蔵野はゆくすゑ近くなりけりこよひぞ見つる山のはの月
- ホ 武蔵野のあしのおぎ葉をわけゆけばすゑ葉よりこそ空は見えけれ

問七 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 陶々斎と遺佚の二人は、主人の季経卿の意向により、武蔵野の様子を和歌に詠むために訪れた。
- ロ 陶々斎と遺佚の二人は、お互いに相手に対抗心を持っており、とかく意見が対立しがちであった。
- ハ 陶々斎と遺佚の二人は、武蔵野で真芋を手に入れようとしたが、ほとんど生産されていなかった。
- ニ 陶々斎と遺佚の二人は、広い武蔵野をめぐるために乗り物を探したが、大八車しか手配できなかった。
- ホ 陶々斎と遺佚の二人は、武蔵野を詠んだ古歌を踏まえたりしながら、滑稽な和歌をお互いに作り合った。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

国朝以来、凡政事有^二大更革、必集^二百官議^一之。不^レ然、猶使^三各^一条^二具^一利害。所以^レ尽人謀而通下情。（中略）後^ニ厭^三其^一多^ニ異同^一、不^レ復^タ講^セ。及^ニ司馬温公^一為^レ相、欲^ニ増^一損^二貢奉之法^一、復^タ將^ニ使^一百官議。因^{リテ}自建^下經明行修^上使^二朝官^一保任^セ之法^一、欲^ニ併^一議^レ之。草具^{シテ}將^レ上^ニ。（中略）先^ニ与^一范丞相相謀。范公曰、「朝廷欲^ス求^ニ衆人之長^一、而元宰先^ニ之^一。似^レ非^ニ明夷泣衆之義^一。若^シ已^ニ陳^一此書、而衆人不^レ隨、則虚^{シク}勞^ニ思慮^一而失^ニ宰相^一体。若^シ衆人皆隨、則相君自^レ謂^ニ莫^一己若矣。然後^ニ諂^一子得^ニ志^一于其間、而衆人默^{シテ}而退。（中略）不^レ若^カ清^{クシ}心^ヲ以^テ俟^ニ衆論^一、可^{ナル}者^ハ從^ヒ、不可^者更^メ、俟^ニ衆賢^一議^レ之。如^ク此、則^チ逸^ニ而易^一成。（中略）」温公不^レ聽。卒^ニ白^一而行^レ之。（徐度『却掃編』による）

（注）国朝……ここでは宋を指す

司馬温公……北宋の司馬光

貢奉……科奉の中で特に推薦によるものを指す

經明行

修……儒教經典に通曉し、行ないも立派であること

保任……推薦して保証人となる

范丞相……宰相府の執政官、范純仁

元宰……宰相

明夷泣衆……君子は徳を隠して皆の上に立つ（易経の言葉）

相君……宰相への呼称

諂子……へつらう人

問八 傍線部1は、「ジンボウラククシテカジャウニツウズルユエンナリ」と読む。この読みに従って、記述解答题用紙の問八の文に返り点のみを記入せよ。振り仮名・送り仮名は付けないこと。

問九 傍線部2「自謂莫己若矣」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自分に逆らう者はいないと思う
- ロ 自己中心的な考えだっただと思う
- ハ 自分と並ぶ権力者はいないと思う
- ニ 自分と同様の意見しかないと思う
- ホ 自分より優れた者はいないと思う

問十 傍線部3「逸而易成」の「逸」と同じ意味の「逸」を含む語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 逸材
- ロ 安逸
- ハ 逸事
- ニ 飘逸
- ホ 逸文

問十一 范公が司馬光に言いたかったことは何か、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 制度改革を進めるに当たり百官に論議させることは、誰が優秀かはつきりさせることができるので有益である。
- ロ 制度改革を進めるに当たり百官に論議させると收拾がつかなくなるので、反対を恐れず、自ら断行すべきである。
- ハ 制度改革を進めるに当たり百官に論議させるのは良いが、上位の者が予め議論の方向を示しておくのは良くない。
- ニ 制度改革を進めるに当たり百官に論議させるのは良いが、各種の意見の可否を判断できる賢者を招く必要がある。
- ホ 制度改革を進めるに当たり百官に論議させると收拾がつかなくなるので、予め議論の方向を示しておくほうが良い。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

技術を行為という視点から見たとき、技術は手段を用いてシヨヨの目的の達成をはかる目的合理的行為の一つであるという理解がなされ、技術的な人工物はこの手段に関わるのだと捉えられる。批判の糸口として、よく知られた事例を用いつつ、まずこの手段説を見直すことから始めよう。

技術の使用という場面に着目したとき、技術が介入することで人間―技術―世界という関係に変化が生じる。人工物と身体とが一体化し、人工物を見たり触ったりするのではなく、人工物を「介して」何かを捉えるようになる。アイデアはこれを「身体化関係 (embodiment relation)」と呼ぶ。例えば、私たちがキーボードを用いて文字を書くとき、キーボードの配列を身につけ、両手で打ち込む一定の身体技法 (タイピング・スタイル) をとっている。キーボードを使いこなすことで文章作成の速度ははるかに向上し、話し言葉に近い感覚で書き言葉の文章を創り出すことができるようになる。ブラインド・タッチに慣れてしまうと、新しいキーボード配列が導入されたりすると、それがどれほど優れたものであっても、混乱を来してしまう。

a、アメリカ式のキーボードの配列は左上から QWERTY と並んでいるが、よく知られているように、この配列は人の指の形状や動作などを考慮してより敏速にタイピングできるように工夫された結果なのではない。

その理由は歴史的にみられた機械的制約によるものである。一五〇年ほど前にレミントン社がタイプライターにこの配列を採用した際には、i や e のような使用頻度の高いバーが互いに絡み合わないようにするという仕様上の理由があった。c、現在のコンピュータにバーなど存在しないし、人間工学的に見ても QWERTY が最適の配列とはいえない。d、いまだに QWERTY 配列が優勢なのは、一定の身体技法を身につけた人々には新しいキーボードはかえって「非効率的」で、新しいキーボードに合った身体技法に組み替えるためには多大な労力と費用を要するからである。クーリーは自動化に伴う機械システムからの人間の排除を批判したが、キーボードのような近代的な技術にも身体性は関与しており、M・ボランニーの言葉を借りれば、1 ののである。そして、キーボードの場合には、このことが技術の発展の方向を左右しているのである。

キーボードの場合は直接に身体化が関係するのであったが、旋盤などの場合にも類似したことを言うことができる。旋盤で実際に作業した体験をした福山弘は、自らの体験をもとに、「設備補完技能」ということを提示している。旋盤のような自動機械での人間の役割は、「次も同じになる」ように機構を監視し、機械のお守りをするという、「補完」にある。どれほど高度な技術であつても、運用し稼働するにあたっては人間の手による補完が不可欠なのである。福山は「技能の排除が技能を求めると述べるが、自動化によって、自動機械を監視しお守りをするという新たな技能が必要になるのであり、この新たな技能はまた、自動化される以前の技能が変容されたものなのである。それゆえ、自動化を顧慮に入れたとしても、技術は「2」(Waldenfels 1990) (注1) であると考えられる。

さて、キーボードや旋盤の例で技術が身体技法と離れてあるのではないことが示された。しかし、これらの例は人工物を介して身体と世界が直接・間接に触れるものであり、それゆえ、世界との身体的な関係のみが問題であるかのようにも思われよう。私たちの見るところ、身体技法も一つの文化的様式であつて、それ自身がハビトゥス (注2) を形成するのみならず、これまでの文化を内在させたものでもある。この点を明らかにするのが第二の事例である。それは、バイカーによる一九世紀後半のイギリスにおける自転車例である。

バイカーは、一九世紀における自転車は、当初、前輪が極端に大きいハイホイール型ないしペニー・ファージングと呼ばれるタイプのものであったが、後に前後輪がほぼ同じ大きさのセイフティ型と呼ばれるタイプのものが発明され、ある時期には両方が併存する形でみられたとする。後者が最終的に勝利を収めることになるが、それは機能や効率の点で前者を凌駕していたためではない。前者はスポーツ用でスピードにすぐれ、後者は日常用で安定性にすぐれていたというように、同じ技術に対して複数の異なる解釈があつたのである。後者が勝利したのは、その乗りやすさがヴィクトリア朝の時代に女性の社会進出につながつたという、当時の文化的要因にあつたとされる。この例は社会構成主義の視点から「解釈の柔軟性 (interpretative flexibility)」と呼ばれるが、私たちにとって重要なのは、ただ自転車をこぐという抽象的な身体動作ではなく、スカートをはいた女性が乗るといふ文化的要因を帯びた身体技法が決定的だった点である。一定の文化圏のなかでそれを用いる人々が人工物をどう捉えるかということが、製作物をどう設計するかという

ことにも影響するわけである。一方で、技術にいかなる意味を認めるかという解釈は、製作された物の選択にかかわるだけでなく、製作過程それ自体にとっても構成的であり、その過程を媒介するということになる。他方、ペダルに裾が絡まないような機能的な女性の服装がこれに伴って生まれ、女性らしい服装を求めるそれまでの文化（ないし社会のあり方）に変化が生じることになる。

さらに、ここで一歩踏み込んで考えるならば、第二の事例は、認知的なレベルにとどまらず、技術が文化的及び社会的なレベルで意味を内在させ、同時に文化及び社会そのものを変化させる媒体であることを示唆している。そうだとすれば、文化的及び社会的な意味は、そのつどの技術のあり方にとって構成的なのである。このことは技術の「中立性」という通念の見直しを迫るものである。

^x 技術の中立性というとき、技術が自律的で、独立変数として社会を規定するということが前提となっている。技術が真空空間ではなく、文化的・社会的ネットワークのなかで営まれ、媒体となるものである以上、技術的合理性や効率性だけで発展するわけではないことは、少し立ち入ってみると当たり前のことである。しかし、技術がネットワークの媒体になるといっても、そのプロセスが私たちに頭わになっていくわけではない。人工物の機能連関に関して言えば、複雑タキな中間過程は多くの場合、使用者にとって入力と出力以外、内部構造が分からないブラックボックスになっている。同様に社会的、歴史的連関に関しても、第二の例で見たように、ある技術が支配的なものとして確立すると、それまで存していた多様な解釈は覆い隠され、その技術以外の可能性は進歩の一段階の試行錯誤とみなされることになる。こうして³ 遡及的に、技術の発展が単線的発展として描き出されるのである。

ところで、第二の事例では女性の社会進出と服装の女性らしさが問題になった。これらは文化的であると同時に、社会的、政治的な問題でもある。そこで、一足飛びに議論を進めることになるが、ここから一歩進むならば、「技術の政治性」というテーマに到着することになる。かりにニーズに応える形で女性が乗りやすい自転車を作ったとすれば、ある一定の社会状況の下では、その自転車は女性の社会進出という価値を内蔵させることになる。これは、バリアフリー設計が登場した背景として、それまで日常的で自明なものであった建物や機械の設計が障害者や高齢者の社会参加を排除するはたらきをしていることが自覚されるようになったことと同様である。バリアフリー設計には障害者や高齢者の社会参加という価値が内蔵されていると言うことができる。こうしたことから、最近では、人工物の設計の各段階において様々な価値に配慮するという意味で「価値感受的な設計」(value-sensitive design: VSD)⁴ という言い方もなされている。

^y 技術の政治性というとき、原発を設置するかどうか、どこに設置するかというような問題だと思われるかもしれない。しかし、そうした次元だけではなく、人工物そのものやその設計に組み込まれているミクロな次元でのポリティクスがある。技術的な人工物も、法律や制度のような人工物と同様に、それ自身が政治的な重要さを持っており、ミクロな政治性を内蔵させているのである。ウイナーはこの点について「われわれが技術と呼ぶものは世界に秩序をつくる方法である。技術的な装置やシステムは、人間の活動に極めて多様な形で秩序を与える可能性をもっており、いったん導入されると、後にくる選択を強く拘束してしまう傾向をもつ。(中略) この意味で、技術は何世代も続く公的秩序の枠組みを確立する立法行為や政治的な土台作りと類似している」と述べている。彼の言い方をそのまま用いるならば、人工物を設計し、イノベーションを図る行為はある種の立法行為や政治的な土台作りなのだということになる。文字通りの政治の場合には、そうしたことに関わる意思決定は、少なくとも建前上は市民の手で議会を経て民主的に行われることになっている。技術の場合には、いったいだれがいかなる仕方で意思決定に関わるのであろうか。

このようにみると、技術が関わるのは科学と比べてはるかに多様な場面であり、⁵ 技術には価値や人と人との関係がきわめて複雑なかたちで関わっていることが明らかになってくる。「科学技術」という括りかたで科学と連続的に捉えられるのは技術の一面にすぎない。

(直江清隆「技術観のゆらぎと技術をめぐる倫理」による)

(注1) Waldenfels 1990……ハイツの哲学者ヴァルデンフェルスの著書からの引用であることを示す。

(注2) ハビトゥス (habitus) ……習慣・態度の意。生活の諸条件を共有する人々のあいだで、個人にそれと自覚されずに作りだされる知覚・思考・行為。

問十二 傍線部 A・B にあてはまる漢字二字を、それぞれ記述解答用紙の問十二の欄に楷書で記入せよ。

問十三 空欄

a

d

に入る語句をそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。ただし、同一の語句が重複することはなく、選択肢には本文に入らない語句も含まれている。

イ それゆえ

ロ ところで

ハ にもかかわらず

ニ むしろ

ホ もちろん

問十四 空欄

1

に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 私たちは道具のしたに「消え去る」

ロ 私たちは道具のなかに「棲み入る」

ハ 私たちは道具のほうに「歩み寄る」

ニ 私たちは道具のそとに「弾き飛ばされる」

ホ 私たちは道具のまえに「駆り立てられる」

問十五 空欄

2

に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 純粋な支配というより奉仕というべきもので、人間の自律性を尊重して技術の純粋な自律性は犠牲にするような随伴作用

ロ 純粋な支配と奉仕を兼ね備え、人間の一方的な自律性も技術の純粋な自律性も共に満たすことを可能にするような相乗作用

ハ 純粋な奉仕と支配の間を運動し、人間の一方的な自律性も技術の純粋な自律性もともに疑わしいものにするような協働作用

ニ 純粋な意味では奉仕とも支配ともいえず、人間の自律性と技術の自律性との区別もつけられないまま進展するような自動作用

ホ 純粋な奉仕というより支配そのものであり、人間の自律性を奪って技術の純粋な自律性をこそ確立しようとするような独占作用

問十六 傍線部 3 「遡及的に、技術の発展が単線的発展として描き出される」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 技術の発展というものは、途中にさまざまな可能性が複線的に存在しているように見えるけれども、実際は初めから一つに決定していたのだということが、後で振り返ってみれば明瞭にわかるということ。

ロ 技術の発展というものは、複線的なさまざまな可能性があったなかで、一つのが優勢になった結果、あたかもその実現のための過程であったかのように、さかのぼって考えられるようになるということ。

ハ 技術の発展というものは、同時代にあつては複線的に存在しているさまざまな可能性の優劣を正しく判断することができず、後の時代に及んでどれが優れていたのかをはじめて評価できるようになるということ。

ニ 技術の発展というものは、実は単線的に描き出されるものではなく、さまざまな可能性が断続的に存在しているにすぎないけれども、後で振り返ってあたかも連続していたように記述されるのが常であるということ。

ホ 技術の発展というものは、実際には運や偶然に強く支配されているもので、たまたまうまくいったものであつても、さかのぼってあたかもそれがさまざまな可能性を単線的に取捨選択した結果であるように見なされるということ。

問十七 傍線部4「価値感受的な設計」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人間の身体的・認知的な特性や利用環境などを考えて、設計に従事すること。
- ロ 設計の常道からはずれても、利用者の要望を最優先して、設計に生かすこと。
- ハ その時々々の最先端の技術的手段をいち早く受け入れて、設計に取り込むこと。
- ニ 古き良き伝統を大切にし、懐かしさを感じられる製品をめざして、設計に臨むこと。
- ホ 周囲の評価にまじわされず、その技術の価値をひたすらに信じて、設計にあたること。

問十八 傍線部X「技術の中立性」、Y「技術の政治性」とある。筆者は、この二つの関係をどのように捉えているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 技術というのは、中立といいながらその時々々の社会や文化を構成する重要な要素にはかならず、人びとの生き方そのものに深く関わり、またその生き方を規定することがあるという点で、その内部に政治性を帯びている。
- ロ 技術というのは、その内部においてブラックボックスであるがゆえに、これまでは社会に対して中立であり得たが、今日ではミクロの次元にいたるまで公開の要求にさらされており、政治的に利用される危険性ははらむようになった。
- ハ 技術というのは、どのように中立性を装っても歴史的に中立であったことはなく、つねにその時々々の社会や文化、法律や制度に左右されることを免れず、たとえ人工物であってもその根底には常に見えない政治の力がはたらいている。
- ニ 技術というのは、どのような時代であっても社会や文化とは一線を画した中立性を保ち、あらゆる人にイノベーションの恩恵を与えることを理想とするがゆえに、最大多数の幸福をめざす理想的な政治のありかたと重なるところがある。
- ホ 技術というのは、中立であることが理想であることはいうまでもないが、現実にはいずれかの社会の構成員のためのものにならざるを得ず、誰がそのイノベーションの恩恵にあずかることができるかを決定するのは、政治的な判断に委ねられる。

問十九 傍線部5「技術には価値や人と人との関係がきわめて複雑なかたちで関わっている」とあるが、筆者は技術の価値や人との関係についてどのように考えているか。問題文の趣旨に即して、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 製品の開発は設計者の担当であるとはいえ、技術の機能や価値が何であるかを決めるのは最終的には使用者であり、その要望の全き実現があつてこそ、技術の可能性と意味を生かすことができる。
- ロ 同時代においてどれほど議論が尽くされても、技術の機能や価値が何であるかは歴史の審判を待たねばならず、文化的社会的環境の変化があつて、技術の可能性と意味を照らしだすことができる。
- ハ 設計者も利用者も製品を構成する要素の一部であり、技術の機能や価値が何であるかは、第三者によるより高次の政策的判断によつて認定されることで、技術の可能性と意味を周知することができる。
- ニ 使用者が参加する対話が必要不可欠だが、技術の機能や価値が何であるかは設計者の責任に属する範疇であり、それによつて本来の理念が首尾一貫し、技術の可能性と意味を十全なものとすることができる。
- ホ 技術の機能や価値が何であるかは、設計者といえども一義的に定めることはできず、使用者の側が参加する対話のなかで再定義されることによつて、はじめて技術の可能性と意味を明らかにすることができる。

(四) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

暴力とはその定義上、主体の意志貫徹のために暴力の対象を客体化することである。他者の存在に呼びかけられてしまうことから始まるケアの倫理は、まずなによりも、ケアを担う者にもケアを受け取る者にも、他者を客体化してしまうこと、すなわち暴力的な主体であることを禁じる倫理であるはずだ。ここで、フィッシャーとトロントによる、もつとも広範なケアの定義を引用してみよう。

わたしたちが「世界」を維持し、持続させ、修復するためになしうるすべてを含む、人類の活動である。それによって、可能な限りよく生きることができる。わたしたちの世界とは、身体、わたしたち自身、そしてわたしたちを取り囲む環境をも含んでおり、そのすべてを、複雑で、命を維持するための網目のなかで紡いでいく。

母子のメタファーを覆っていた幻想の脱神話を経たわたしたちは、今やトロントたちのいうケア実践が、自他を一体化して捉える利害対立のない調和的なユートピアにおける実践であるのではなく、その逆に、時に他者からの否応ない呼びかけによって自己が翻弄され、時に圧倒的に弱い他者を圧殺してしまいそんな誘惑に駆られつつ、だからこそ強い倫理が課せられた実践であることを知っている。ケアにはつねに軋轢あつれまが内在しているのだ。より正確にいうならば、自他との間には必ず軋轢が存在し、その軋轢を根絶することは不可能であり、また、根絶を試みることは自他を滅ぼすことに他ならないのだから、自他の間には常にケアの倫理が要請される。

ハイデガー(注1)は、脆弱な存在を危害から守り、大切にすること、あるいは誰かによって保護されている状態を、自由だと論じ、この場合の自由こそを、平和と定義する。「平和な状態を享受していることは、親しいひとに囲まれてつまり、自由な身となって、すべてがその本性のままに保護されていることを意味している」。ここで平和として構想されているのは、他者のケアによって守られることで、放っておけば圧殺されるかもしれない脆弱な存在が救済されているような状態である。

フェミニストにとってこのハイデガーの議論が重要なのは、公的関心から排除され、その社会的価値を奪われてきた依存関係を生きてきた女性たちが、まさに現実を経験してきたことに、的確な言葉を与えてくれているからである。そしてさらに、自律的主体が政治的に理想視されるなかで、矛盾を感じ、自らもそうした主体となる誘惑に抗ってきた女性たちの葛藤と闘いを、平和を構想する運動として捉え返すことが可能となるからである。ここにわたしたちは、自律的主体批判にその根をおくフェミニストたちが構想する平和を、はつきりと「非暴力」、さらには「反暴力」として定義することができる。

自律的主体の抽象的な思考に対して、母的思考という概念を提唱したルディク(注2)もまた、したがって母的思考は、平和構築をめざす政治的闘争に参加しているのだと論じる。彼女によれば、なによりも「平和構築者とは、暴力から目を背けるのではなく、むしろ暴力を探し出し、誰がいかに傷ついたかを詳細に尋ねようとする」者である。

軍事的思考は身体を武器の延長と捉え、兵士を具体的な個人としてではなく量的な戦闘要員と考えることで、身体が被る苦痛から目をそむけることができる。同様に、主にリベリズムが前提とする自律的主体の抽象性は、戦時でなくとも現代の主権国家に免れがたく刻印されている、意志によってはコントロール不可能な身体性(注3)（他者性）への残酷さを隠蔽してもいる。

身体性を拾象するために、「軍事的思考は、組織的で、計画的な死を正当化」することができる。その最たるものは、アウグスティヌス(注4)の時代から連綿と続く、正戦論である。

正戦論は、現代の国際政治や国際法の世界を支配し、目的と手段の因果論にきつく拘束された、軍事上の一撃が引き起こす事態やその結果と余波を最後までコントロールできるとする、傲慢で抽象的な思考である。

それに対して、「誕生に始まり、生を約束してきた」母親業を担う女性たちから生まれてきた思考は、歴史的に置かれてきた無力な者の立場から、そして、無力な者たちが暴力の対象となってきた歴史から紡がれてきた。したがって、その思考は具体的な現状に根づいている。ここでの具体的な現状とは、暴力に満ち、無力な者たちが無価値であるかのように扱われ、いかなる報いもなく傷つけられても、多くの者が無関心でいられるような現状である。したがって、そうした現状を変革するために平和を志向し、思考する母親たちは、しばしば無責任と同一視される「平和主義」ではな

く、「戦闘的」なのだ、ルディクはあえて名づけるのだ。

しかし、無力な者の立場から、巨大な軍事産業と国家の凭れ合いだけでなく、日常の暴力に溢れる現実には、どのような「戦闘」がありうるのだろうか。ルディクは、銃後を支えてきた女性たちを美化する言説を細心の注意を払って批判しながら、なお「嘆きの母は、平和を求めるといふに頼りになる媒介者」であるという。嘆きの母^(注4)というイメージは、母親業に携わる者が大切にしてきた価値に対する脅威を正確に見分ける思考を鍛えてくれる。そのイメージは、被害者の傷に対してじっと耐えるのではなく、むしろ「嘆き続ける」⁵ことのもつ批判力をわたしたちに気づかせてくれるからである。嘆き続けること、それは、現に傷ついている身体だけでなく、もはや存在しない身体をも悼むことである。そして、どんなに怒りにかられても、「暴力と闘う勇気をもつ」よう、自らも苦悩し、傷ついた者たちのために祈り、時に自らが暴力に溢れる交渉の場へと参加していくのである。

こうして母的思考から生み出されてくる平和構想のプロジェクトとは、「貧困、専制、人種差別といった構造的暴力から自由になる」ことであり、構造的暴力からの自由を求める闘争を統制する四つの理念は、「武力放棄」「抵抗」「和解」、そして「平和維持」であると定義される。こうして、平和を求める闘争が理念化されてもお忘れではないことは、この理念を支えているのは、無力な者たちが傷つけられている現状をいかに暴力に抗しつつ変革するのか、という実践的な母的思考なのだ。無力な者に加害を与えた者たちは、その被害の程度どころか被害の事実さえ忘れ去るうとし、暴力を受けた者たちを無価値化しようとする現実こそ、母的思考を「戦闘的」な平和実践に駆り立てる。ルディクは「嘆きの母」の実践を、一九七〇年代アルゼンチンの女性たちの抵抗運動を例に論じている。

子どもたちは不在であり、母親たちはかれらではない。だが、母親たちは断固として、消え去らないで、体をはってそこにいる。唯一の、取替えのきかない子どもたちは、失われた。しかし、母親たちが身に着けている写真が示唆するように、消えてしまったからといって、子どもたちは母親たちから離れてあるのではなく、その不在において、母親たちと共にいる。

痛みに代表される私秘的なものと、怒りという表出可能なものの媒介者としての「嘆きの母」のイメージは、それが体現する非暴力性によって現在進行形の危害を終わらせようとする。そして、危害を公に暴くことによって加害の責任者に責任をとらせ、自らの痛み、親戚の痛み、そしてすべての消え去った人たちの痛みを公的に語りだすことによって、断ち切られた人びとの間の絆の結び直しと、共同体の再建を、広く世界に訴えるのだ。

軍事作戦と主体性との関連を読み解きながら展開される自律的主体批判を、ひとの身体性、予測不可能性、偶然性、他者性との対峙がつねに要請されてきた母親業から抽出される思考法、すなわちケアの倫理に連動させることで、わたしたちは日々の親密な生活圏から、新たに非暴力的な社会を構成する原理を見いだすことが可能だ。非暴力的な社会を構成するのは、ルディクが言うように、「武力放棄」「抵抗」「和解」「平和維持」といった理念の下に、「貧困、専制、人種差別といった構造的暴力から自由になる」実践である。そうした実践と理念を、多くの女性たちが担ってきたケア実践のなかにこそ見いだそうとしてきたのが、ケアの倫理を中心としたフェミニストたちの試みなのだ。

こうしてわたしたちは、理解を超える他者とともに軋轢を抱えつつ、自らの生を他者と偶然にも共有・分有する営みのなかから生まれた実践知を、フェミニストによる平和構想の核心に位置づけることができる。この実践知は、既存の母性養育や前近代への回帰を促すのとは逆に、政府の再配分機能の一翼を担う制度としての「家族」を超えた、ひととひととの解放的なつながりをも示唆するものになるはずである。⁶

(岡野八代『フェミニズムの政治学』による)

(注1) マルティン・ハイデガー(一八八九〜一九七六)……ドイツの哲学者。『存在と時間』で名高い。

(注2) サラ・ルディク(一九三五〜二〇一一)……アメリカのフェミニズム理論家。ケアの倫理を練成した。

(注3) アウレリウス・アウグスティヌス(三五四〜四三〇)……初期キリスト教会最大の教父。『告白録』で名高い。

(注4) 嘆きの母……イエス・キリストの受難を嘆く聖母マリアのこと。

問二十 傍線部1「ケアにはつねに軋轢が内在しているのだ」とある。それはどのような意味か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ケアとは、他者からの否応ない呼びかけによって自己が翻弄され、圧倒的に弱い他者を圧殺してしまいそうな誘惑にかられつつなされる実践であり、そこには自己と他者を一体化して捉えるユートピア以後の力の平行関係があるということ。

ロ ケアとは、他者の存在に呼びかけられることから始まり、他者を客体化する暴力的な主体であることを禁じる倫理であり、そこには母子のメタファーを覆っていた幻想における自己と他者の力の葛藤があるということ。

ハ ケアとは、他者の存在に呼びかけられることから始まり、その脆弱な存在を客体化し圧殺する暴力の誘惑に抗いつつなされる実践であり、そこには利害対立を超えた調和ではなく、自己と他者の危うい力の拮抗関係があるということ。

ニ ケアとは、自他を一体化して捉える利害対立のない調和的なユートピアにおける実践ではなく、そこにはケアを担う者にもケアを受け取る者にも、暴力の対象を客体化することを促す自己と他者の力の相互作用があるということ。

ホ ケアとは、自他を一体化して捉える利害対立のない調和的なユートピアにおける実践であるのではなく、そこには時に他者からの否応ない呼びかけによって自己が翻弄され、他者を圧殺しかねない自己と他者の力の対称性があるということ。

問二十一 傍線部2「女性たちの葛藤と闘いを、平和を構想する運動として捉え返すことが可能となる」とある。なぜ「女性たちの葛藤と闘い」が「平和を構想する運動」として解釈できるのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ハイデガールの議論における平和とは、脆弱な存在が親しいひとに囲まれて自由な身となってすべてがその本性のままに保護されていることを指すが、それこそは自律的主体批判にその根をおくフェミニストたちが構想する平和にほかならないから。

ロ ハイデガールの定義する平和とは、脆弱な存在が誰かに保護されることで自らを自由だと感じる状態のことであるが、このように自由な身となって、すべてがその本性のままに保護されている平和こそは、自律的主体の政治的理想視とその矛盾を批判するから。

ハ ハイデガールの議論における平和とは、脆弱な存在が他者のケアによって守られることで圧殺を免れて救済されることを指すが、それこそは「非暴力」「反暴力」として定義される、社会的価値を奪われてきた依存関係を生きてきた女性たちの目的だから。

ニ ハイデガールの定義する平和とは、脆弱な存在が大切に保護されることで自由な身となってすべてがその本性のままに保護されている状態のことであるが、このように存在が救済されている平和こそは、依存関係を生きてきた女性たちがまさに現実を経験してきたことだから。

ホ ハイデガールの議論における平和とは、脆弱な存在が危害から守られ、大切に保護されることで自由な身となって救済されている状態を指すが、それこそは公的関心の外で女性たちが培ってきた依存関係の本質であり、その社会化は自律的主体どうしの対立を無力化するから。

問二十二 傍線部3「主にリベリズムが前提とする自律的主体の抽象性」とある。ここで言う「自律的主体」はいかなる意味で「抽象」的なのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 主にリベリズムが前提とする自律的主体は、戦時でなくとも現代の主権国家に免れがたく刻印されており、その結果、暴力から目を背けるのではなく、むしろ暴力を探し出し、誰がいかに傷ついたかを詳細に尋ねることを放棄するという意味において。

ロ 自律的主体は、母的思考という概念を提唱したルディクとは反対に、組織的で計画的な死を正当化する軍事的思考を基礎づけ、その結果、アウグスティヌスの時代から連続と続く正戦論にみられるように、身体性を捨象しつつ国際政治や国際法を支配するという意味において。

ハ 主にリベリズムが前提とする自律的主体は、意志によってはコントロール不可能な身体という他者性を捨象し、その結果、軍事的思考においては身体を武器の延長と捉え、身体が被る苦痛さえも無視し、誰がいかに傷ついたかを考慮の外に置くという意味において。

ニ 自律的主体は、軍事上の一撃が引き起こす事態やその結果と余波を最後までコントロールできるとする、傲慢な思考を導き出し、その結果、兵士を具体的な個人としてではなく量的な戦闘要員と考えることで、現代の主権国家の強固さを隠蔽するという意味において。

ホ 主にリベリズムが前提とする自律的主体は、母的思考という概念を提唱したルディクとは反対に、身体を武器の延長と捉え、その結果、意志によってはコントロール不可能な身体性を、現代の主権国家に免れがたく刻印されている抽象性の基礎づけとするという意味において。

問二十三 傍線部4「思考する母親たちは、しばしば無責任と同一視される「平和主義」ではなく、「戦闘的」なのだ」とある。ここで言う「戦闘的」とはどのような意味か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 女性たちの思考は、誕生と生を約束する母性から生まれたものであり、無力な者たちが暴力の対象となる具体的な現状に根ざすリアルな思考であって、彼らが無価値であるかのように扱われ、傷つけられる現実を変革しようとするその平和志向は「戦闘的」である。

ロ 女性たちの思考は、歴史的に置かれてきた無力な者の立場から、そして無力な者たちが暴力の対象となってきた歴史から紡がれてきた思考であり、女性たちが傷つけられても多くの者が無関心でいられるような現状を変革しようとするその平和志向は「戦闘的」である。

ハ 女性たちの思考は、誕生に始まり、生を約束してきた母親業を担う者から生まれてきた思考であって、巨大な軍事産業と国家の凭れ合いを批判し、暴力に満ち、無力な者たちがいかなる報いもなく傷つけられる政治体制を打倒しようとするその平和志向は「戦闘的」である。

ニ 女性たちの思考は、暴力に満ち、無力な者たちが無価値であるかのように扱われても、多くの者が無関心でいられるような現状に根ざすリアルな思考であり、巨大な軍事産業と国家の凭れ合いを許さないその平和志向は「戦闘的」である。

ホ 女性たちの思考は、誕生に始まり、生を約束してきた母性から生まれてきた思考であり、無力な者の立場に寄り添う思考であって、無力な者たちがいかなる報いもなく傷つけられるにもかかわらず、日常の暴力に溢れる現実を変革するその平和志向は「戦闘的」である。

問二十四 傍線部5 「嘆き続ける」ことのもつ批判力」とある。ここで言う「批判力」とはどのような意味での「批判力」か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 「嘆きの母」は平和を求めるさいに頼りになる媒介者であり、現に傷ついている身体だけでなく、もはや存在しない身体をも悼むその祈りは、どんなに怒りからられても、暴力と闘う勇気をもつように促し、時に自らが暴力に溢れる交渉の場へと参加していくという意味での批判力。

ロ 嘆き続けることは、傷ついた者たちのために祈ることをとおして、「武力放棄」「抵抗」「和解」「平和維持」という構造的暴力からの自由を求める闘争を統制する四つの理念を広く知らしめ、一九七〇年代アルゼンチンの女性たちにおけるような哀悼を核とした抵抗運動を可能にするという意味での批判力。

ハ 「嘆きの母」は嘆き続けることによって、無力な者に害を加えた者たちに、被害の程度どころか被害の事実さえ忘れ去ろうとし暴力を受けた者たちを無価値化しようとするのを許さず、痛みに関われた私秘的なものと怒りという表出可能なものの媒介者の役割を果たすという意味での批判力。

ニ 嘆き続けることは、傷ついた者たちのために祈ることをとおして、脅威を正確に見分ける思考を鍛え、暴力に溢れる交渉の場への参加を可能にすると同時に、自らが体現する非暴力性によって現在進行形の危害を終わらせ、痛みを公的に語ることで加害責任をも追及するという意味での批判力。

ホ 「嘆きの母」が体現しているのは、無力な者たちが傷つけられている現状をいかに暴力に抗しつつ変革することかという実践的な母的思考の特性であり、傷ついた者たちのために祈ることをとおして、脅威を正確に見分ける眼差しを鍛え、被害者の傷を真正面から見据えるすべを教えるという意味での批判力。

問二十五 傍線部6 「ひととひととの解放的なつながり」とある。ここで言う「ひととひととの解放的なつながり」とはどのようなことか。著者の考えるケアの倫理を踏まえて二二〇字以上一八〇字以内で説明せよ。(解答は記述解
答用紙の問二十五の欄に楷書で記述すること。その際、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず一
マス用いること。)

(以下余白)

早稲田大学 法学部
2018年度 入試問題の訂正内容

<法学部 一般入試>

【国語】

- 問題冊子9ページ：設問（四） 後ろから9行目

(誤)

身体性を拾象するために、「軍事的思考は…

(正)

身体性を捨象するために、「軍事的思考は…

以上